

## コンサルティである教師が捉えたコンサルテーションに関する有効感が高いコンサルタントとは

○ 小林朋子  
(静岡大学教育学部)

庄司一子  
(筑波大学大学院人間総合科学研究科)

### 1. 目的

学校におけるコンサルテーションでは、教師はコンサルティ、スクールカウンセラーや相談員などがコンサルタントとして、それぞれの役割を尊重しつつ行われる。本研究では、コンサルティである教師の側から捉えた、「相談してよかった」と感じるコンサルタント像について明らかにすることが目的である。

### 2. 方法

(1)調査対象者：静岡県、千葉県、大阪府内の中学校に勤務する教師（管理職を含む）946名。(2)尺度の作成：Erchul&Chewing(1990)の「Consultant Effectiveness Scale: CES)」を参考にし、「コンサルティによるコンサルテーション有効感尺度」を作成した(8項目)。(3)調査内容：調査用紙の内容は、表紙にコンサルテーションに関する簡単な説明文をいれ、コンサルテーションのイメージを統一するようにした。コンサルタントへの相談経験について尋ね、これまでに子どもの対応についてアドバイスもらったコンサルタントの中で、ぱっと頭に思い浮かんだ特定のコンサルタント一人について、性別、年代、配置について答えてもらった。さらにそのコンサルタントについて4段階で評定してもらった。(4)調査時期：2005年12月上旬～2006年2月中旬(5)実施の手続き：県・市教育委員会を通して協力が得られた中学校に調査用紙を送る方法と、教員研修会などに参加した教師にその場で協力を求め、直接配布・回収を行う、のいずれかの方法で実施した。

### 3. 結果

(1)回答者の概要：調査対象者1252名のうち回答してもらったのは946名(有効回答率76%)。コンサルタントに「相談したことがある」と答えた教師は568名(60.0%)。データ解析はコンサルタントに相談した経験がある、と答えた教師の回答を用いた。(2)CES尺度の信頼性・妥当性の検討：

「CES尺度」の構造を明らかにするために、SPSSVer. 14を用いて主因子法による因子分析を行ったところすべての項目の因子負荷量が0.68以上で、1因子とした。 $\alpha$ 係数は0.92であった。(3)CES得点と教師(コンサルティ)の属性：教師の性別×年代の2要因分散分析では、交互作用および主効果に有意な差が認められなかったが、職種ごとの1要因分散分析では有意な差が見られたため( $F(3, 541)=3.73, p<.05$ )、Tukey法による多重比較を行ったところ、管理職が最もCES得点が高く、担任教師、その他でカテゴリーされた教師と有意な差があることがわかった。

	担任教師	管理職	養護教諭	その他	F	
n	353	44	33	115		
MEAN	3.11	3.44	3.23	3.10	3.73*	管理職>担任教師、その他
SD	0.66	0.48	0.58	0.67		

(4)CES得点とコンサルタントの属性：コンサルタントの性別(男性、女性)×年代(20, 30, 40, 50代)で2要因分散分析、配置方法(校内、校外)ではt検定を行ったが、いずれも統計的に有意な差は認められなかった。次に、CES得点が低いもしくは高い教師の群ごとの傾向をつかむため、教師のCES得点を、「平均値±SD」ごとに、「CES高群」(68名)、「CES中群」(409名)、「CES低群」(72名)に群分けした。このCES各群と、コンサルタントの年代ごとにクロス集計をし $\chi^2$ 検定を行ったところ、有意な差が認められたため( $\chi^2(8)=16.4, p<.05$ )さらに残差分析を行った。その結果、CES低群の教師が想起したコンサルタントは60代以上が多く、30代が少なかった。CES高群では、40代が多く20代が少ないことがわかった。

### 4. まとめ

コンサルタントへの相談が有効だったと思った教師は管理職が多く、担任教師は低かった。またCES高群では、40代のコンサルタントをイメージした教師が多く20代は少ないことがわかった。